

(3) その他

返信用の封筒あるいは葉書の宛名には「〇〇行」となっているが、返信するときに「行」を二本斜線で消し、「様」あるいは「御中」と書き換えよう。結婚式への出席案内の返事をする場合、「出席」の下に「させていただきます」と書き、御芳名、御住所の「御」は二本斜線で消す。また、往復はがきの場合、往信葉書を切り取って返信はがきのみを出す。

ところで、手紙や葉書といった書簡が少なくなった今日であるが、年賀状と暑中見舞いはいまだに盛んにやり取りされている。年賀状は年賀に行けない人が年賀の挨拶を手紙に書いて送った習慣からと言われている。「賀正」「謹賀新年」などの書き出しで、最後の日付を「〇〇年元旦」とする。元旦には1月1日という意味で、たまに「1月元旦」と書かれている年賀状を見るが誤りである。

年賀状を出すのは”松の内”（1月7日頃）までで、年賀状を出しそびれた場合には「寒中見舞い」を出すことで礼を尽くすことが出来る。寒中見舞いは大寒（1月20日頃）から立春（2月4日頃）までの間に出す見舞いの書簡であり、「寒中お見舞い申し上げます」という見舞いの言葉と日付のみでよい。参考までに、立春を過ぎて出す場合は「余寒見舞い」となる。

暑中見舞いは盆の贈答の習慣が簡略化されたもの。かつては盆に里帰りする際、祖先の霊に捧げるための物品を持参する風習があり、お世話になった人への贈答の習慣（お中元）になっていた。その際、本来は直接訪問して届けるのが一般的であったが簡略化され、手紙で済まされるようになったのである。これが暑中見舞いのルーツである。

暑中見舞いを出す時期は小暑（7月7日頃）から立秋（8月初め）までの間で、立秋を過ぎると「残暑見舞い」となる。